



ルですとフラットなヒールをカーブのあるボディにに取り付けるので、何度も削って調整しなければならぬのですが、この方法ですとピッタリとフィットしますから、削って調整する必要がないのです。

—チューナーはフリクション・チューナーではないですね。

Gary: フリクション・チューナーは満足がい

くクオリティーのものが見つからなかったのです。ウクレレ・プレイヤーがどんなチューナーを好んでいるのか調べたところ、ギア・チューナーの方がチューニングが合いやすく、使いやすいということが分かったのです。ですからコンサートとテナーはギア・チューナーに、ソプラノはトラディショナルなフリクション・チューナーを使っています。

# High River Ukulele

■ Y.Kawakami Guitars 川上祐介 ■ 奥 和宏

## ドレッドノート型ウクレレはいかにして生まれたか?

マーティン・ファンは大喜び。ウクレレ・プレイヤーならびっくり仰天……。マーティン・ドレッドノートを、そっくりそのままウクレレ・サイズに縮小したような、ユニークなデザインの楽器を製作した人がある。カナダ在住の日本人ビルダー、川上祐介さんがその人だ。ウクレレ版ドレッドノートという大胆なアイデアが実現した陰には、楽器作りにかける徹底したこだわりがあった。

### ●ギターに近いタイトなサウンド

ぐいっと肩の張ったアッパーバウト(上半身)。勢いよく広がるローワーバウト(下半身)。そんなドレッドノートの豪快なフォルムに、ストリングピンの付いたエボニーのペリー・ブリッジ、ヘリンボーン・トリム、そしてダイヤモンド・スクエアのポジション・マーク…。一見ヴァンテージのD-28のようなたたずまいだが、よく見るとどうも様子がおかしい。弦の数が4本しかないではないか。おまけにサイズもやけに小さい。これって、もしかして…?

ウクレレ・ドレッドノート、略してUD。ハイリバーのウクレレ“UDシリーズ”は、その名のとおり、マーティン・ドレッドノート・ギターをウクレレ・サイズにスケール・ダウンした、ユニークなデザインの楽器だ。最初に話を聞いたときには、正直、それほど感心したわけでもなかったのだが、聞くと見るとでは大違い。現物を実際に手にしたら、その迫力に圧倒されてしまった。ウクレレ・サイズになっても、ドレッドノートはやはりドレッドノートだったのだ。

今回試奏させてもらったのは、ハイリバー(川上)ブランドのUD-28KKというモデル

だ。びっしりとトラ目の入ったハワイアン・コアのボディに、14フレット・ジョイントのホンジュラス・マホガニー・ネック。テナー・ウクレレ・サイズはありそうだが、ネックは少し短めな印象だ。ベグヘッドの裏にはしっかりポリウレタンも付いている。通常のウクレレに比べると、アクションは少しきつめに感じた。とはいえ、けっして弾きにくいことはない。レスポンスがよいぶん、むしろ弾きやすかったくらいだ。コア・ボディらしいタイトなサウンドで、トーンは固め。サステインもかなり長い。サウンド面、演奏性共に、ウクレレとギターの間のような印象の楽器だった。

### ●デザイン優先の音響設計でひと苦労

UDシリーズを開発した川上祐介さんの工房は、カナダ・ノース・バンクーバーの工業地帯にある。1999年にはカナダのワーキング・ホリデー・ビザを取得して、ラビエの工場に1年間修行。2002年に再びカナダに渡り、現在は自身の工房を開いてカスタム・ギターやウクレレの製作を続けている。

このカナダでの暮らしは、海外で活躍する日本人を紹介するNHK-BSのドキュメンタリー「ファーストジャパニーズ」でも取り上

げられたことがある。木材の選定、ギター製作の現場、現地のプレイヤーとの交流まで描かれた興味深い内容だった。とくに印象的だったのは、製材した板をさらに天日にさらす手法だった。川上さんによれば「Pacific Northwest特有の紫外線の強い天日に夏の期間中干し続ける」ことで材のシーズニングを徹底するらしい。

この番組でも地元のウクレレ・プレイヤーとの交流が描かれていたが、UDの開発のきっかけとなったのも「無骨でガッツリとしたドレッドノート・シェーブのウクレレがほしい」という、プレイヤー兼コレクターからの依頼だった。やるからには、ただ単に形を真似るだけではなく「ドレッドノートの威厳を保った」楽器にしなければならない。

自ら起こしたブリウオー・ドレッドノートの図面を元に、テナー・ウクレレ・サイズにスケール変換していった。ドレッドノートの縮尺だと、ボディをテナー・サイズにした場合、ネックのスケールはコンサートとテナーの間くらいの長さ(名づけて「コンテナ・スケール」)になる。ここで問題が生じた。14フレット・ジョイントにした場合、通常のテナー・ウクレレでは、ブリッジの位置はローワ

ーバウトの中心に来る。ところがドレッドノートのデザインだと、ボディのウェスト(くびれ)近くまでずれてしまう。これではブリッジからボディ・エンドまでの距離が長すぎて、トップへの音の伝達効率が悪くなる。この問題をどのようにして解決すればいいか? デザインを優先させて、そこから音響を設計していくという、いつもとは逆の発想を迫られた。

### ●プレーシングはファン・パターン

プロトタイプは、内部のプレーシングのパターンを変えて2本作った。1本はマーティン伝統のフォワード・シフトド・スキャロップト・プレーシングを採用したモデル。もう1本は、ファン・プレーシングのモデル。こちらはボディの横幅に合わせて、プレーシングを5本並べることにした。この2本を弾き比べてみると、明らかにファン・パターンのほうが、よりウクレレらしい音がする。基本設計はこれで決まった。このプロトタイプを元に、芯のある歯切れのよいサウンドを持つ楽器のキャラクターを活かすため、ボディ材をコアに替えて第1号機を作った。これが45スタイルのオール・コア・モデル、UD-45KKだった。

最初のモデルが完成したのは、2004年8月のこと。その後も、トップにアーチをかけて音の立ち上がりをよくしたり、ボディを横切る細長く薄いブリッジ・プレートを採用したりと、改良を加えていった。細長いブリッジ・プレートのアイデアは、強度を確保しつつ弦の振動をボディに効率よく伝えるための工夫で、1920年代のマーティン製タロパッチ(8弦4コースの複弦ウクレレ)を修理したときに思いついたという。

UDシリーズには、オール・コア・ボディのモデル(KK)のほかに、スプルース・トップ/コア・バックのモデル(SK)、オール・マホガニー・ボディのモデル(MM)、スプルース・トップ/マホガニー・バックのモデル(SM)がある。

ボディに使うコア材は、ハワイに直接出向いて選別。バンクーバーに持ち帰って数年間自然乾燥した後に、楽器用のサイズに製材。それから上記したような天日干しを行なうという。トップ材に使うスプルース(SKモデル)は、ブリティッシュ・コロンビア産のシトカ・スプルース。ネックはホンジュラス・マホガニーの1ピース。ネックには、カーボンファイバーをロッドとして埋め込んである。



**UD-18MM**  
Top : Honduras Mahogany  
Side : Honduras Mahogany  
Back : Honduras Mahogany  
Neck : Honduras Mahogany  
¥199,500



**UD-28KK**  
Top : Hawaiian Koa  
Side : Hawaiian Koa  
Back : Hawaiian Koa  
Neck : Honduras Mahogany  
¥294,000



**UD-28SK**  
Top : Sitka Spruce  
Side : Hawaiian Koa  
Back : Hawaiian Koa  
Neck : Honduras Mahogany  
¥283,500

